

ヨハネス・デ・レーケの提案により始まった『河川距離標！』

■河川距離標は河川の番地！

堤防の上を通行したり、散策している時に、写真①のような「河川距離標」と呼ばれる「杭」を見掛けられたことはありませんか？ これは、河川管理のために必要な重要な基準点です。かつては、木杭や石杭が用いられていましたが、現在では、ほとんどがコンクリート製の杭が用いられています。



写真① 河川距離標杭

私たちの家や土地は「番地」で表しますが、河川の中では、その位置を「河川距離標」を基準として表します。例えば、河川距離標「35.0K」より800m上流の位置は、「35.8K」となります。

国が管理しています河川の管理区域では、河川の両側にある堤防のり面には、大体200m間隔で「河川距離標」が設置されています。河川距離標の横には、位置とその表示が、容易に分かるように標識が立てられており、1Km間隔では、写真②のように「河口よりの距離」として表されています。また、2011年の東北地方太平洋沖地震の発生後は、堤防の標高についても、海拔からの高さを明示しています。



写真② 河川距離標の標識表示

■川の中で表す河川距離

しかし、この「河川距離標」の間隔をよく観察しますと、200mより長かったり、また、短く感じることがあります。これは、「河川距離標」は、堤防の上の間隔ではなく、川の中心の距離を表しているからです。

「河川距離標」の設置に当たっては、河口の川の位置を起点として、川に沿って200m間隔に、川の中心に直角方向の堤防のり面に設置されています。従いまして、河川が湾曲している場合は、外側となる堤防では河川距離標の間隔は200mより長く、反対に内側では短くなっています。

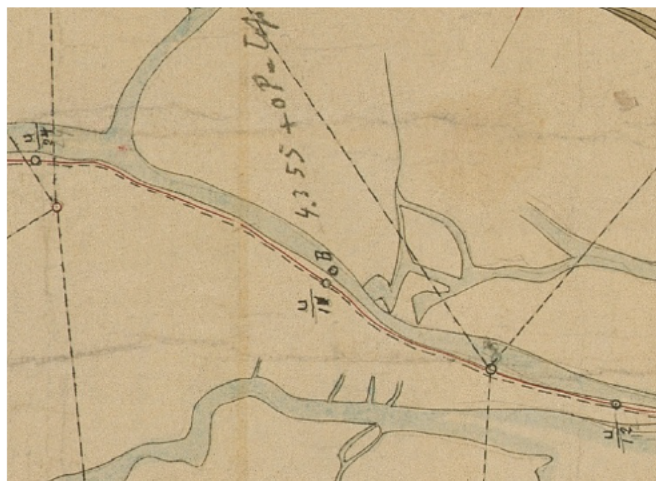
■ヨハネス・デ・レーケの提案により始まる

現在見られるような「河川距離標」の設置は、オランダ人技師であるヨハネス・デ・レーケが提案したことに始まります。デ・レーケが明治11年（1877）に木曽三川を調査して、その結果を「木曽川下流概説書」として報告をしています。その中に「距離標」に関して次のように提案しています。

『標識 前野村ノ下流ヨリ海口
二至ルノ間、仮定メタル新木曾
川ノ河床ニ標杭ヲ設クヘシ、此
ノ杭ハ距離毎式丁ニシテ凡流心
トナルヘキ所ヲ測リコレヲ傍フ
テ設置シ、而シテコレヲ図上ニ
記載スベシ。』



現在では、このようにして設置された明治時代の河川距離標を見ることは出来ませんが、当時の図面には、二丁（約218m）間隔に河川距離標が書き込まれ、分子には「里」、分母に「丁」が表示され、「丁杭」と呼ばれていました。



明治時代の河川距離標の位置が示された図

現在のようにメートル表示とされたのは昭和初期、この時、河川距離標の位置も変更されたものと思われます。

【季刊誌kisso 第67号より一部引用】